海洋開発委員会　歴代委員長インタビュー

北海道大学総長
佐伯浩先生に聞く

海洋開発エンジニアリングレターNo.1では、海洋開発委員会第２代委員長の酒匂敏次先生に「祝海洋開発エンジニアリングレター」と題して寄稿頂きました。今回はインタビュー形式で、第３代委員長の北海道大学総長佐伯浩先生に「海洋開発への期待」について伺いました。

Q：はじめに佐伯先生のご専門である氷海域をとりまく最近の情勢について伺います。
佐伯：北極海航路については、確かに、オープンシーになる傾向があるようですが、これは一時的であるという意見が結構強いのです。もともと北極海自体が不安定な状況にあり、これからますます夏場になると結氷が狭くなる、という保証はまだないといえそうです。確かに航路としては通り易くはなりますが、冬になったら当然氷に覆われます。実際にはそういう所のほうが技術的には難しいと思います。がちがちに凍っていたほうが、ものごと楽ですから。かえって中途半端になるほうが、色々な要因が出てくるでしょう。氷のない海域が広がり、波によって氷は割れて劣化しますと、かえって他の副次的な問題が起こってきます。船がある時期は非常に通りやすくなることは間違いないですが、トータルで、ほんとに良いのかは分かりません。北海道でも流氷がびっしり来ているときに水産被害が少ないことからわかるように、中途半端に来ているほうが危ないわけです。

我々土木技術者が社会基盤施設を造るときには、不安定な状態があるほうが、技術的には難しい気がします。あるときには、大きな一枚の氷があるとか、あるときには、ばらばらにまいた氷がくるとか、それから、波と共存した状態になる、というほうが、技術的には、厄介ですね。今まで、有るか無いかと、大きく分けてきたものが、中間的な複雑な状況が出てくるほうが、技術的には難しい訳です。今後、いろいろ解決すべき問題が出てくると思いますので、まだまだ研究が必要な分野という気がします。

Q：海洋技術開発における日本の地位低下に危機感がありますが、いかがお考えですか？
佐伯：海洋開発に携わる日本の会社が、新たな技術を開発して、また世界で頑張っていくぞって言う意欲が若干なくなってきているように思えます。企業だけが悪いわけではありませんが、日本の中で、最初は一台でもいいから良いものをきちっと作ろうと考え、お金かかってもいいから頑張って作って、結局それが世界を制する、といった技術の風土が少ないよう思います。日本の場合は、一台を作るためには組織が動きにくいのかもしれません。

海洋開発では海を探るセンサー部分の開発が重要です。北大の理学研究科の先生に、世界に一台しかないセンサーを作っている人がいます。つまり、オンリーワンを目指すこと

ですね。オンリーワンっていうのは、お金がかかって、儲けが少ないけれども、実はそれが、長い目で見れば技術への投資に繋がるわけです。

Q：土木分野での地域貢献のあり方について、いかがお考えですか？
佐伯：やはり今、公共事業が無駄という論調が根強いですね。しかし実際に、我々の生活がこういう風にスムーズに進んでいくのは、当然、社会基盤のおかげです。なかなか一般の人には、そういう風に頭の中で繋がらないのかもしれません。北海道なんか島国ですから、大半のものが船で運ばれてくるので港が大事ですが、なかなか分かってもらえない。いかに市民の皆さんに荷物が運ばれるまで、公共事業でやっている社会基盤が大事な役割を果たしているか、もう少し PR が必要と思います。

河川や道路に比べたら、港は PR での遅れを感じます。港は点であるので、河川や道路のような線と違って分かりにくいのかもしれません。道路では、小学校や中学校の先生とかを招いたりね、副読本を作ったりして、いろいろなところを見せてあげたりしています。いかに子どもに、社会基盤としての道路の重要性を訴えています。そういう努力の甲斐あってファンが結構います。写真大会をやって小中学校の先生方に審査員になってもらうとか、あの手、この手を使って、若いうちから重要性を知ってもらおうと努力しています。港や海岸でも、もっと力を入れておく必要を感じます。

Q：最後に、海洋開発委員会へひと言をお願いします。
佐伯：　近い分野を受け持つ学会同志は切磋琢磨して、他の学会をつぶしにかかるくらいの勢いが必要と思います。1980 年代のアメリカでは資源、機械、土木分野においてこうした学会間の熾烈な競争がありました。良い研究テーマが集まる学会が勝ち組です。あえて同じに日に講演会を設定する、なんてことが実際にありました。

今、日本には海を対象として活動する学会が数多くあります。分野の境界おいては積極的な協力が必要でしょうが、学会間の競争も必要です。海洋開発委員会も、こうした中で多くの良い論文を集め、常に新しい情報を発信する集団として進化を続けられることを期待しております。

聞き手：木村克俊・大塚夏彦（海洋開発委員会幹事）